

長野市方言の今昔

大橋 敦 夫

1. はじめに

今回の公開講座の第1回めで、ご担当の沖裕子先生が、長野県の方々は、上京に際して、自身が方言話者であることをあまり気にせず、自らは「標準語」を話している場合が多いということをお話しされました。聴講されていた方の中にも、うなずいている方が多くいらっしゃいましたが、このあたりの事情について、長野県方言研究の泰斗・馬瀬良雄先生は、次のように指摘されています。

長野県の人たちはよくこんなことを言います。

信州の方言はひじょうに東京弁に近い。だから東京へ行ってもすぐに東京弁になじみ、東京出身の者と間違えられる。

このことばはある意味で長野県方言の性格や位置を言いあらわしています。

馬瀬良雄『信州の方言』(第一法規 1971.7)

この「ある意味」には、二つの事例がからんでいます。すなわち、東京式アクセントと、標準語形分布率全国第6位という事実です。

日本語のアクセントは、東京式・京阪式・一型の三つに分けられます。長野県は、東京式アクセントの地域に属していますので、長野県で生まれ育てば、自然とそのアクセントが身につきます。

また、『日本語語地図』(国立国語研究所)をもとに、標準語形の各都道府県分布率を調査した河西秀早子氏(1981)によると、長野県の順位は、東京・埼玉・栃木・神奈川・群馬に次いで、第6位となっています(林大監修『図説日本語』角川書店 1982.2 p.436-437)。

長野県民の方が、生活実感としてとらえている感覚は、このように、調査・研究の裏打ちがなされることでもあると言えます。

また、当地を外から見た指摘として、次のようなものがあります。

長野といえば、山梨などよりずっと文学者が豊かな土地である。ところがここでもおどろいたことに、長野市を書いた文学がほとんどないのである。たいてい善光寺におまいりして、すぐに戸隠とか、松本に行ってしまう、長野の街のことはちっとも出てこない。（「長野県立図書館」の項）

海野 弘『日本図書館紀行』（マガジンハウス 1995.10）

全国の図書館を探訪されている海野氏の感懐で、文学に関するものですが、長野市はその特徴が薄いとされています。

このように見てくると、果たして、現代の長野市には、方言的特徴があるのだろうか、ということになるのですが、これが今回のお話の出発点であります。

2．市民の愛着

昨年（2015）の5月に、長野市民をメイン・ターゲットにする『長野市民新聞』に一通の投書が寄せられました（第2907号 2015.5.16）。

「のびろ」大好き まいんち食べる

（TY 男性・71 = 稲里町）

おらほうじゃあ「のびろ」ってせているけど、ほんとは「のびろ」ってせうらしい。おらほうの田んぼや畑のあぜをめぐりゃじき1回や2回分ぐれある。俺はこれが好きでまいんちってせうくれご飯のおかずにしてる。いくつも年離れていねのに、おんなしょはきれだせうんだから、俺が採ってきてしょうね、自分でこしれて刻んでみそとみりんと、さとちょっとかんますだけでおしめえ。しょっぺからあんまり食べんなってせわれるけど、こん時だけしか食べらんねからつい箸伸びてしまう。そだから「のびろ」ってせうんかやあ。

春を感じさせる食用の野草「野蒜（ノビル）」をめぐっての一文で、本稿掲載後、反響が大きく、方言の語り口を支持する投書が3通も続きました（第2909号 2015.5.21 / 第2911号 2015.5.26 / 第2912号 2015.5.28）。

若い年代ほど、方言的特徴が失われているのは、他地域と同じと言えますが、ある年代までは、当地の特徴を保持しているとも言える事例です。

お話を進める前に、上記の投書を共通語に訳しておきましょう。

「ノビル」大好き 毎日食べる

私たちのところでは、「のびろ」と言っているけれど、本当は「ノビル」というらしい。我が家の田や畑の畦をさがせば、すぐに1回や2回分ぐらいはある。私はこれが好きで、毎日というくらい、ご飯のおかずに使っている。何歳も年が離れていないのに、妻は嫌いだというものだから、私が（自分で）採ってきて、仕方がない、自ら調理する。刻んで、味噌と味噌と、砂糖をちょっと入れてかき回すだけで、おしまい。塩味が強いから、あまり食べないほうがよいと、言われるけれど、今しか食べられないから、つい箸が伸びてしまう。それで、「のびる（ノビル・伸びる）」というのかなあ。

3. 大正期の方言集 VS 昭和期の方言集

今回のお話のテーマのもとに、皆様にご紹介したいのは、次の2資料です。これらを比較対照（主に語詞について）しながら、気をつくことを述べようと思います。

「長野地方の方言」（『長野市史』長野市役所編・発行 大正14（1925）年10月）……「T」と略（後掲「資料」に翻刻）収録語数 184 語

北村俊司（小林一郎編）「善光寺平の方言集（一）～（三）」

（『長野』286・287・288 平成24（2012）年12月・平成25（2013）年2月・4月長野郷土史研究会 長野市）……「S」と略

収録語数 863 語

は、大正期の発行ですが、「明治初年の頃迄」のものを収録したとの触れ込みです。発音の特徴については、3点をあげ、個々の語について「訛」の注記もあり、方言矯正のきらいがないとは言えない感じもします。また、方言とは言いかねる例（「モシカスルト」）も含まれており、俚言の収録に徹したものでなさそうです。編集背景が不明な点が多いのですが、残されていること自体を多とし、見ていくこととしましょう。

は、大正13年長野市生まれの北村俊治氏が生活の中で書き溜めてきたもの（昭和58（1983）年3月現在）を、50音順に配列したもの。意義のほか、用例や解説を加えた項目もあります。

収録語数に5倍近い差があるので、単純な比較はできませんが、60年ほどの時間を経て、継承されている語は59語（語形の近似を加えると68語）で、半数以上が失

われています。それらの語例を次に掲げます。

T・Sともに採録されている語(Sの表記を例示): 59語

いかず・えぼつり(虫)・えべ・おっち・おちょうべ・おじょこ・おっさん・
おどける・おっこおっこ・おっつ・かまける・かたる・があたく・かがっばい・
どのかん・きぼこ・くつばす・けし・けそけそ・げえもねえ・げえに・ごわす・
こかす・ごきたね・さばよ・さがねる・たあくらたあ・たまげる・わんだれ・
だあさあ・ちょうどっこ・ずらい・ずで・ずるい・ずく・どうずく・なるい・
なっちょだ・なっちょも・ななやと・ねなくら・はねる・はあるか・はした・
ばっか・ばい・びちやる・へえ・へえとら・ぶつ・ふてる・ぼこ・までえ・
まる・もうらしい・もげる・われ・わにる・おしょぼる

T・Sを対照して近似の語: 9語

アツタラ~あったらもん・クラセル~くらしつける・クネテ見エル~くねっぺ・
ゴーガワク~ごがわく・サレツカマワズ~されかまんどく・ゾゼール~ぞぜる・
セツコウ~せっこいい・ママカカ~ままっか・メツタメツタ~めった

Tの「発音」で指摘されていたような混乱は、現在あまり耳にしなくなりました。
語形も共通語形が幅をきかしており、若い世代では、上記の59語(もしくは68語)も、
ほとんど知らないという方が多いと思われまます。

なお、一例ですが、小生の母(昭和6年長野市生まれ、長野市育ち)を対象に、T
の語についてたずねてみました。その結果は、次のとおりとなりました。

知っていて、使う語.....35語

アバケル・アツタラ・イヂカメル・ウソコツキ・ウソヲコク・エボツツリ・
オツチ・オチヨウベ・オジヨコ・オメサン・オツサン・オドケル・カブリツク・
カマケル・カマンドケ・ガータク・カマウ・ギミツコワルイ・ゲーモナイ・
ゴーガワク・コワイ・スツポカス・タークラター・タマゲル・チョードッコ・
ツライ・ツク・テンカラ・ママヤキ・マル・モーラシ・モシカスルト・ムツ
ツカイ・ヤダ・

知っているが、使わない語.....50語

イカツ・エベ・オナシヨニエンデクロヤ・ガツキヤー・カクネツコ・カガツ
ポイ・ドノカン・クロ・クネテ見エル・ケソケソ・ゲーニ・ゴワス・コマルシ・
コンデ・ゴキタナイ・コマルハサー・ナンノコンダイサー・シエーモシツカス

パツテ・セツテ・ゾゼール・セツコウ・わんだレ・チクサイ・チャー・テンゴ
ヲカク・ナルイ・ナツチヨダ・ノクトイ・ヌクトイ・ハナ・ハグル・ハシタ・
バツカ・ピチャル・ヒガ目・ヘ　・ベト・ベンゾウ・ボコ・モゲル・メツタメ
ツタ・ヤレール・ヨバル・ヨチケル・ワレ・ワンダレ・オシヨボル・オツボシ
ヨル

知らない語.....99 語

市の中心部で生まれ育ったこと、両親ともに新潟県出身ということも影響しているのか、北村氏と7歳の差しかありませんが、「知っていて、使う語」が少なめになっています。また、その語例も微妙に違っており、生命力の強い語というのは、数がさらに限られてきます。

4 . 特徴的な語

世代が若くなるにつれて、発音の点でも、語彙の点でも、共通語化が進んでくのは、当地に限らず、全国的な傾向です。ただ、話し言葉で使われなくなったことに代わり、書き言葉での方言の活用が積極的に行われるようになっていきます。

参照：井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美・『魅せる方言
地域語の底力』三省堂 2013.11

それらは、方言グッズと称されることもあり、方言をあしらった商品やスローガンを日ごろ目にすることも、おありではありませんか。

T・Sともに挙げている語で、いくつか例を指摘してみましょう。

「ぞぜーる」「T」 「ぞぜる」「S」

戸隠スキー場内のレストハウスの名称が「ゾゼール」です。カタカナで書かれると、フランス語のようですが、れっきとした長野方言です。外来語を装うことで、オシャレさを強調する狙いがあると思われます。

「なっちょだ」

長野市を中心とするグルメガイド本で、シリーズ化されているものがあり、そのタイトルが『500円でなっちょ！？』。付属のクーポン券により、掲載店舗では、500円でお食事ができるのがウリです。好評のようで、中信版も出て、そちらのタイトルは『500円でどうずら！？』です。

次に、Tのみに載る語の例です。

「ぬくとい」

信州新町内で売りに出された防寒商品(「ぬくたい」)、ネクタイ地に厚手のものを使用、首に巻いて暖かいネクタイと方言をかけたネーミングです。

一方、Sのみに載る語では、次の例があります。

「てんづけ」

長野市内の酒造会社の手掛ける焼酎の銘柄です。日本酒や焼酎の銘柄に方言を用いる例は全国各地に見られます。

このほか、気になる語について、ふれておきます。

「ななやっと」

T・Sともに挙げる語ですが、現在耳にすることは、まずありません。淵源は、『万葉集』の時代の禁止表現「な～そ」にさかのぼるものです。つい最近までは使われていたというのは、まさに「古語は方言に残る」の典型例です。とはいえ、終息と目されるので、その時期を探るのが今後の課題です。

「いかず(行かず)」

この語について、Sでは次のように注記しています。

此の辺では、意味と逆な言葉が比較的多い。例えば、「われ(我)」…相手を指す言葉、「いかず(行かず)」…行くこと、など。これは上杉・武田の川中島合戦の頃、敵方の間者を惑わす為に使ったのが今に残っているとかわわれている。

この語は、中世の語形「行かうず」の「う」の脱落と見られ、「古語は方言に残る」の一例とも言えるものです。言語学的な裏付けは取れませんが、使用者自身がその語をいかにとらえているのかは、それはそれで考察の対象とすべきものです。こうした事例を当事者語源(民間語源・民衆語源とも)と呼びます。

5. 信州方言の未来像 「ずく」をめぐって

県民気質を物語るキーワードとなるのが、「ずく」(「ずくなし」)ですが、この語の未来はどうか、二つの調査結果をご紹介します。

一つめは、短大生の方言意識に関するものです。本学では、近年、信州方言をテーマにした公開行事を行いました(「信州弁サミット」(2012年)・「信州方言フェスタ」(2014年))。その際、在学生にアンケート調査を試み、「あなたの好きな信州方言は？」

(2012)「私の好きな信州の言葉」(2014)を尋ねました。どちらの調査でも、「ずく」(もしくは「ずくなし」)がトップでした。「長野特有の感じが好き」「他の言葉では言い表せないところ」などの理由もあげられ、愛着がもたれています。

参照：大橋敦夫・佐藤 厚「『信州弁サミット』のまとめ」『上田女子短期大学
観光文化研究所 所報』第11号 2013年3月

『信州方言フェスタ・ミニブック』2014年7月

信州方言の未来は、「ずく」を愛好する彼女たちに託すことになるのですが、ここ
にきて、これと相反する調査結果が報告されました。

駒ヶ根市に住む中学生を対象にした調査で、それによると、「ずく」を知らない中
学生が半数を超えているそうです。

参照：清水はるな「駒ヶ根市の中学生約250人の方言と方言意識」長野・言語
文化研究会 2016年2月27日発表資料(『ことばと文化』第8号 長野・
言語文化研究会 2016.3掲載予定)

新しい価値観で生きる世代の登場でしょうか、今後も信州方言から目が離せません。

資料

『長野市史』(長野市役所編・発行 大正 14 (1925) 年 10 月) 所収の「附録」

長野地方の方言

明治以前には、長野にも方言多かりしが、爾来交通の便開けしと、移住人の多きとによりて、旧来の方言は、大部分消滅し去りて、発音も言語も、大方は標準語即ち東京語に近づけり。(今日も下流の家庭及び場末には行はる) 今明治初年の頃迄行はれし、発音方言の主なるものを挙げん。

発音

イとエとの混乱 ジュとジヨとの混乱 コとヨとの混乱

方言 (傍線は、(訛)と注記している部分)

アラネ(霰)

アバケル(ふざける)

アツタラ(おいしい)

イコ(あまり イコな事もいはれぬ)

イト(間 休で居るイトに)

イツチ(第一 イツチよい)

イヂムツサ(いぢきたな)

イツケル(結ひつける)

イヂカメル(いぢめる)

イカヅト思ツテ(ゆかうと思つて)

ウヌ又ウナ(おまえの卑語)

ウソツコキ(うそつき)

ウソヲコク(うそをつく)

ウラ(木の梢)

エボツツリ(よく腹を立つ人)

エボツツリ虫(かまきり)

エベ(行け さあエベや)

オビイ（尼僧）
オツチ（唾者）
オニカイ（鬼ごっこ）
オチヨウベ（おべつかる事）
オジヨウコ又オジヨコ（おとなびたる事、こましやくれたる事）
オメサン、オメツチ（あなた、御前方）
オト（人の声、オトを出す）
オネ（根本 オネつから）
オツサン（おぢさん）
オクリヤイ（下さい）
オイダイ（おいでなさい）
オケヤ（よせや そんなことはオケヤ）
オナシヨニエンデクロヤ（いつしよに行てくれる）
オドケル（驚く ああオドケタ）
ガツキヤ（小児を呼ぶ罵声）
オツコオツコ（こわいこわい）
オツツ（おとし、わな）
ガイロ（蛙）
ガニ（蟹）
カンバラ（越後獅子）
カヅワラ（かるわざ）
カナクリ（からくり）
カクネツコ（かくれつこ）
カブリツク（くいつく）
カマケル（ぐちをいふ）
ガマイ（こすい）
カタル（赤子をもりする事、なかまになる事）
カマンドケ（かまわずおけ）
ガ タク（乱暴）
カガツポイ（まぶしい）

カマウ(いぢめる)
カラ、クラ(いぢめる)
ドノカン(どのくらい)
キボコ(人形)
ギリ(すり)
キヨクル(からかふ、ばかにする)
キジヤケンキジヤケン(ちんちんもがもが)[片足跳び・筆者注]
ギミツコガヨイ、ワルイ(両方甲乙なき事、ある事)
クジナ(たんぼぼ)
クビツリ(首くくり)
ク口(くれる)
クツパス(くすぐる)
グザル(不理屈をこねる)
クラセル(なぐる)
クネテ見エル(年よりふけて見ゆる)
(ケシ)鳥の糞
ケンツ(けんつく)
ケソケソ(しゃーしゃー)
ゲーモナイ(役にも立たない)
ゲーニ(ひどく、きつく)
コシヨー(唐辛)
ゴンゼ(こごと)
ゴーガワク(はらがたつ)
ゴワス(ございます)
ゴンド(共同)
コカス(ぶつ)
コマルシ(こまるよ)
コンデ(ことで そんなコンデ)
コワイ(色の濃い事)
ゴキタナイ(きたない)

コマルハサー（困るなー）
ナンノコンダイサー（何の事だなー）
サバヨ（さようなら）
ザラ（沢山）
サラ（ばかりしか これサラない）
サレツカマワズ（すこしもかまはず）
シミル（凍る）
シエーモシツカスバツテ（為し得ないくせに）
サガネル（さがす）
スグリ（つらら）
スベリツト（下駄にて氷上を横にすべる事）
スルシ（しるし これはスルシばかりですが）
スツボカス（物をなげる事）
ズイバイ又ズイツコ（甲乙なき事）
セツテ（いつて ソーセツテモ）
ゾツキ（純粹）
ゾゼール（あまへる）
セツコウ（こんき）
ソナイニ（その様に）
ソーイツテモイイ（いかにもいい）
タークラター、略してタク（でたらめ）
ダイロ（かたつむり）
タマゲル（驚く）
ダクナ（やくざ）
ダレ（わんだレ、きさまたち）
ダーサー（否、いいえ）
チクサイ（ちいさい）
チョードツコ（ちょうど）
チャー（なんだつチャー 何の事だらう）
ツコヲカツクラセル（頭をなぐる）

ツメル（戸などしめる事）
ツライ（しツライ しにくい又それツライの事 そればかりの事）
ツダイ又ツデ（論外）
ツルイ（のろい事）
ツク（気力 ツクヲだす、ツクヲぬかす、ツクヲやむ、ツクなし）
ツミツカク（爪でひきかく）
ツミツケル（爪でつめる）
テンカラ（はじめから）
テンバジメ（まつはしめ）
テンゴウヨカク又テチゴウカク（もがく又てんかんをおこす）
トーネ（小馬）
ドーツク（ぶんなぐる）
ドーツル（なまける）
トーロヲマク（とぐるをまく）
トラメル、トツカメル、オサメル（捕へる）
ナバ（雪類ナダレ）
ナシカイ（ないかい）
ナルイ（寒さなぞのよわい事）
ナヲシカ（なほさら）
ナツチヨダ（どんなど）
ナツチヨモ（願はくば）
ナナヤツト（決してやるな）
ナイ（ねー そーしてナイ）
ネナクラ（不得要領）
ネタボタ（餅をつく音 ぺんたらこぺんたらこ）
ノクトイ、ヌクトイ（温い）
ハネル（はじめる）
バヤカス（ばかす 狐にバヤカされた）
バソク（即時）
ハナル（はじまる）

ハナ（はじめ）
ハールカ（時の長き事）
ハグル（本の頁をかへす事）
ハシタ（死んだ又いつた）
バツカ（ばかり）
ハジクナル（しやがむ）
パイ（衣服の事、小児語）
ハマル（かかる 棒を持つてハマル）
ピチャル（すてる）
ヒガ目（やぶにらみ）
ヘー（もー へーすんだ）
ベト（泥）
ヘートラ、ヘートラ、ヘシ、ヘタ（むやみ）
ヘービ（蛇）
ベータン棒（棒きれ）
ベンゾウ（ベソ）
ブツ（うつ 鉄砲などに）
フテル（水にひたす）
ブルケル（ぶらさげる）
ボヤ（たきぎ）
ボコ（あか子）
ホド（鍛冶屋の火口）
マテ、マテー（儉約、慎重）
ママヤキ（どもり）
ママカカ（おけら虫）
マネクリヲツク（とんぼがへりをする）
マル（大小便をたす）
マクマク（日没のうすあかり）
見セイク（見に行く）
モーラ（もぐら）

モーラシ(きのどく)
モゲル(老耄)
モシカスルト(ことによると)
ムツツカイ(むづむづする、くすぐったい)
メチヨ(めっかち)
メツタメツタ(何度も何度も)
ヤダ(いやだ)
ヤクナシ(やくざ)
ヤリシナ(やりながら)
ヤツトクリヤイ(売てくれ)
ヤレール(為し得る)
ヨナウ(てつだう)
ヨバル(よぶ)
ヨタ(人、物等の質のあしき事)
ヨヂケル(よろける)
ヨ一サリ(夜)
ワレ、ワンダレ(汝、汝等)
ワニル(失望する、しよげる)
オショボル、オツボシヨル(折る)
ツチミザ(地面)
ヒヨ一ナ(雛)